

獅子舞ししまい

獅子舞は市内の約六〇%、一四一町に伝承され、特に小獅子が天狗面や花笠、鶏烏帽子姿の棒振りなどと共に舞

い、悪魔祓いや五穀豊穡を祈るための「舞獅子」形式の演舞が大半である。また旧市街地は五月のお旅まつりに、

周辺農村部では九月の秋祭りに出される。小松に現存する最古の獅子面は鎌倉時代、元亨二年（一二三二）銘の国指定重要文化財、津波倉神社蔵の大獅子頭で、その他に江戸時代後期の龍助町と京町、大杉中町の獅子面があり、それ以外は明治時代以降のものばかりである。

演舞は子どもが中心の「五十鈴流神楽獅子」が大半で、その起源は龍助町が文化十一年（一八一四）に寺町の吉光屋次郎助ら三人を伊勢へやり、

太々神楽梅莊太夫から神楽獅子舞を学んで後、大獅子として舞われたのが始まりと伝える。芸態は獅子が銅拍子とささらを手にした二つの蝶と戯れる様子を表現し、のどかで優雅な雰囲気の特徴的で、獅子頭の睨みと四足の足さばきに妙技がある。笛と太鼓による舞い囃子と道中囃子の二種がある。

また明治時代初期に、弥左衛門なる人物が若者数名とともに九州長崎へ行き、中国式の獅子舞を習ってきたとか、大正十二年に富山県高岡より伝習したともいう額見町の俗に小棒振り（コンコラコン）と棒廻し（チーチーラカ）、寝獅子の三種の獅子舞がある。これは大獅子をからかう鶏の舞い、若者が山中で獅子と格闘する舞い、農夫が寝ている獅子を見つけ、瓢箪酒を飲みな



国指定重要文化財 津波倉神社所蔵の木造獅子頭



龍助町の大獅子舞

がら滑稽^{こっけい}な仕草でいわゆる寸劇^{すんげき}のようなニワカを演じる小松を代表する寝獅



額見町のコンコラコン(鶏烏帽子の棒振り)

子系統の獅子舞である。その他、頭にシャンガンをかむり鎖鎌^{くさりがま}や太刀^{たち}、薙^な



串町の長吉寝獅子

刀^{なた}を手にした棒振りによる獅子殺し系統の獅子舞もある。
(小林忠雄)